

体験的教師教育論

赤澤 孝^{*1}, 荒川 義弘^{*1}

An Essay to Help Students with the Aim of Becoming a Teacher

Takashi AKAZAWA^{*1} and Yoshihiro ARAKAWA^{*1}

Organization for Fundamental Education

Now, we take charge of students of teacher training course in our university.

However, there are many important things which are not written in their textbooks or we can't teach enough in lesson.

Therefore, we gather those things into this article to help students of teacher training course.

Key Words: 特別支援教育, 生徒指導, チーム学校

1. はじめに

現在, 教職支援室を設置し, 教員育成を目指して教育に携わっているが, 教科書や授業の中で話きれない多くの大切なことがある。

そうした内容を何か読み物としてまとめ, 教員養成の一助としたい。

2. 教育の出発点は児童生徒をよく見, 理解することである。

授業は実際に進めてみて, 子供の反応により必ず見直すこと。

授業を進めている途中でも常に見直すことが必要である。

昭和48年福井大学教育学部附属養護学校を創るために学校建設チームに参加した。

大学近くの水田の中に学校を創ろうというのであった。今でこそ, その近くに中学校や, 県立武道館までが建設され, ある程度は賑やかな場所となったが, 当時, 田んぼの中に立ったときは, 安易に引き受けたことを後悔する思いの方が勝っていた。

自分に課せられていた任務は, 高等部の実習棟を造り上げることであった。それは, どのような教育をするかが明確になっていないと, とてもできないことであった。

自分にとっても初めての知的障害児の教育であった。福井大学附属中学校校舎の一部を借り, それまで物置であった部屋を整理し掃除して何とか教室らしくし, 2名の高等部の生徒を受け入れ, 福井県内初の知的障害児の高等部教育を開始した。まず, 毎日の授業で何をしたらいいかを, 前日の夕刻からやっと思え始めるという, たいへんな毎日を過ごしていたのである。

原稿受付 2017年2月28日

^{*1} 基盤教育機構

E-mail: takasiakazawa@fukui-ut.ac.jp

最初の努力は、附属の高等部に入学すれば、勉強も少しはできるようになるのではないかという親の期待も強くあり、少しでも普通児・生徒に近づけようとするものであった。算数や、言語能力などの力を伸ばすために、少しでも具体的なものを取り入れながら推し進めていく工夫をしていた。さらに、理科の実験などを取り入れ、特殊教育ではほとんどなされていなかった理科教育を試みた。具体例としては、理科教材を単元設定し、子ども達が反応しやすい電気教材などを開発し実践した。養護学校における理科教育は当時としては珍しく、多くの人の注目を受けたことを思い出している。

次に、生徒が自分自身で継続してできることはないかと思いつき、気象観測を始めた。学校の片隅に手作りの小さな百葉箱を設置し、温度計や湿度計、自動記録の気圧計も購入し、計測を続けた。幸いなことに、私の担当した生徒は機器の操作や測定を習得することができたのである。

観天望気によるお天気、新聞のその日の予想天気図なども切り抜き、毎日その日の気象カードを生徒とともに作成した。この実践を他に発表したことはなかったが、未だに書斎にそのカードの一部が残してある。当時の生徒と自分が、さて何をやろうかということで作り始めたものの一つであったが、はたしてこれで良いのかという迷いは常にあった。というのも普通学級で行われているものとははるかに見劣りし、これでは児童・生徒の気象研究や科学研究としてとても発表することはできないものだったからである。今、50年近くの年を経て改めて見てみると、その観測をした細川君は3年間にわたって観測を続けたし、その丁寧さは全く別な意味からとてもすばらしいものであった。この経験を、後に勤務した美方養護学校での気象研究に引き継ぎ、その結果、3名の生徒の日本学生科学賞特別賞入賞につなげることができた。

当時の特殊教育は、普通児教育を手本とし何とかそれに近づけようとしていたが、それらの努力はほとんど実を結ばなかった。そのために、教員集団の士気も上がらぬことが常になっていた。

そこで我々は、小学部の児童に対しては基本的生活ができるようにする教育が中心であるが、中学部や高等部においては、「子どもはかくあってほしい」「かくあるべきである」という教員や親の思いをもう一度見直し、児童生徒の知的好奇心を喚起するような教育活動から始めた。生徒が関心を持ち、喜んで取り組める教材を考え出し、活用したのである。教科もそれらの内容を含むイベントを中心にしたものとした。たとえば、夏のキャンプを目指してテントを張ったり飯盒炊飯の練習をしたりするなど、きわめて具体的で生活に密着した教材を取り入れて、その中で教科の学習を行ったのである。生徒達の顔の輝きが増していったことは誰の目にも明らかであった。

我々は、目指す目的を持って教育に取り組むのであるが、それはどうしても健常な子どもを前提とし、理想を思い描きながら進めていってしまう。しかし、知的障害児の教育においては、多くの教員は当惑することの連続であった。当時は、昭和54年度の養護学校配置義務化を目指していたころであり、多くの知的障害児は修学猶予という措置がとられていた。福井県でも、知的障害児学校の第1号を作っていた頃であった。あるべき姿や目標は誰も示すことができず、つい健常児教育の考えを取り入れてしまうのだが、この考えは少しも役に立たず、むしろたいへんな負担と苦しい思いを子どもや教師にもたらすものであった。そこで我々は、この考えを捨て去り、まず子どもをよく見ることから始めた。このことは、現在の教育においてもとても大切である。障害児についてはもちろん、多くの特別支援学校においては当然のこととして取り扱われているが、子どもをよく見極めるということは、どのような児童生徒を対象としても、必ず十分に考慮しなければならないことである。この点をおさえて初めて生徒達とのコミュニケーションをスムーズに進めることができるのである。

授業では、教師自身が自分の得意なところも出しながら、授業を作り上げていくのであるが、生徒の反応をいろんな角度、手段で見極め、常に改善を繰り返しながら実践することが大切である。

本県初めての知的障害児のための養護学校は、昭和48年に開校され、高等部の実習は窯業、印刷、機業でスタートした。福井県の基幹産業は繊維産業であり、特に細幅織物は90%近くのシェアを占めていた。機業は実習棟の中でも半分ほどの面積を占め、機業のメインの仕事を細幅の織機とした。当面学校の名札を織り上げるつもりであった。それに関連したシャトルの糸巻き機や糸繰り機なども用意した。さらに木製の機織り機も準備し、これらの機械を動かし、作品や製品を作る課程を取り入れた実習教育を始めたのである。

3. 生徒指導は決してその場を逃げ出さないことが肝心である。

どうして良いかわからないときでも決して諦めないことである。
自分を忘れて没頭することである。

ある高等学校で校長をしていたときのことである。女性教員が校長室に息せき切って飛び込んできた。今、その女性教員が担任している生徒の母親がやって来ると言うのである。しかも、クラス内でその母親の子供がいじめられており、その原因は担任にあるという訴えだと私に伝えるのがやっとであった。

その当時、私は福井県高等学校校長協会の副会長をしており、その日は会議のため、まさに出発しようとしていたそのときであった。女性教諭の真剣な迫力もあったが、とっさに「わかった校長室に案内しなさい」と言い、会議には遅れる旨の連絡をしたが、務めるはずの議長の代わりをどのように手配したかは覚えていない。

件の母親はたいへんな剣幕で入ってきた。「うちの子は小学校時代からいじめられてきた。今、高校生になってもいじめられている。その最大の原因はクラス担任にある。」とまくし立ててくる。とにかく落ち着かせようと椅子に座ることを勧め、母親の言うことに頷きながら聞き続けた。

すると、まったく予想できなかったことではあるが、20分ほど話を聞いていくうちに母親が非常に落ち着き、攻撃的態度がなくなってきたのである。“これまで、校長が直接話を聞いてくれたことはなかった”とのことであった。このような会話になれば、次の具体的対策なども相互に話ができるし、“日時を決めて次の話をしよう”としてもいいのである。

私も会議で議長を務めなければならないことを伝え、“明日もう一度話をしましょう”と切り出し、母親の快諾を得、会議にも間に合った。もちろん当初は、“今日一日でこのことを決着しよう”と心に決めて話し始めたのであるが、母親は、校長が逃げ出さないとわかったことで今後すべてを解決してくれると感じ取ったようであった。

教育の場ではいろいろなことが起こり、いろんな場面が発生してくる。そんなとき、自分のことは後回しにして、子どもや生徒のこと保護者のことなどを最優先に没頭することにより解決の糸口は見えてくるものである。

答えが予測できなくても、見当たりそうになくても逃げ出さないこと、その場を離れないことがとても大切なことである。教育の場面は変化し続けていく。

4. 職業高校での生徒指導

生徒に自信を持たせる工夫が必要である。
生徒が胸を張って卒業していくことを目指すのである。

職業高校（農業・水産・工業・商業・家庭・看護・福祉）に進学してくる生徒達の多くは、中学校の成績によって振り分けられ、行きたい高校というよりも行ける高校として受験し、合格した生徒であることが多い。したがって、彼らのほとんどが普通科高校の生徒に劣等感を持ち、何事にも自信がなく、おとなしい性格の持ち主で、クラスのリーダーを選ぶのにも一苦労するような状況である。

そういう生徒達に自信を持たせる手段としては、部活動での活躍、難関資格の取得などがあり、その延長上に優良企業への就職や大学進学がある。

工業高校では、各学科で入学してまもなく関数機能付き電卓の操作の速さと正確さをみる「計算技術検定」を受検させる。合格者には、全国工業高等学校長協会から合格証が届けられる。これは、生徒にとって大きな自信につながるとともに、指導した教師も一安心できる場面である。

このように、比較的合格しやすい検定を経て、危険物取扱者試験や第2種電気工事士、ボイラー技士、測量士補などの難しい資格試験に順を追って挑戦させていくのであるが、指導する教師は早朝のいわゆるゼロ時限目や放課後に生徒を集めて補習をする。

資格は、就職試験の際、大きなアピールポイントになる。

一方、福井県の平成27年度の学校基本調査によると、普通科高校の卒業生の約7割が大学等に進学し、就職率が約

11%であるのに対し、職業学科の就職率は50.8%に達し、とりわけ工業は就職率69.6%に達している。

したがって、工業高校をはじめ職業高校では、卒業後の就職に備えて社会人としてあるべき姿を在学中から求め、指導している。たとえば、職員室に入るときのマナー、廊下で教師とすれ違う際のマナー、返事の仕方、服装や言葉遣いなど細かい点について逐一指導するのである。これは、校外での行動にもつながり、見知らぬ近所の人たちへの挨拶や日頃乗降する駅などでのマナー、列車内でのマナーにまで及ぶ。このような行動が、地域や企業の学校に対する評価を高め、就職内定率の向上につながっていると思われる。

また、校外での部活動やコンテスト等の入賞などにおいて、たとえ一位でなくても壁新聞のようなものを作って校内に貼り出し賞賛するなど、自信を持たせモチベーションを高める工夫をしている。

このような取り組みは、学校の各部署だけで行うのではなく学校全体の取り組みとして定着しているが、ここに至るまでの道のりは長く、教職員の共通理解がなければできないものではない。ここ数年、本県の就職内定率が常に全国トップクラスを維持している理由の一つとして、このような地道な取り組みがあると思う。

職業高校は、社会に出して恥ずかしくない生徒に育てる宿命を背負っており、その実践により、生徒達は入学してきたときとは打って変わって晴れ晴れとした自信に満ちあふれた表情で学び舎を去っていくのである。

とは言うものの、生徒達も十人十色、明るく元気な生徒もいれば、うつむいてほとんど話さず友達もいない生徒もいる。しかし、内向的な生徒も、いつしか保健室や教育相談室など自分の居場所をつくり、不登校になることは稀である。内向的な生徒に対しても、卒業後の進路については面談の機会を持ち、自分が何をしたいのか、何になりたいのか等について話し、考えさせ、卒業までには進路を決定できるように指導する必要がある。そこで、内向的な生徒には、その生徒が相談しやすい教師や友人に間に入ってもらい、進路指導を行っている。

このように、職業高校では、社会に送り出して恥ずかしくない教育の実践、生徒自身が自信を持つ教育に、それぞれの教師の得意分野を活かし他の教員を補完し合いながら、学校を挙げて取り組んでいるのである。時々新聞でご覧になるだろう「クラス全員が〇〇資格合格」という記事は、その背景にあまりに大きな努力があることを想像していただけたらと思う。

5. 子どもの目線、子どもの発想をともに持てることが大切

子供が積極的に学びたくなる環境をさりげなく作っておくことが大切である。

学校の学ぶ場に児童生徒が関心を持ちそうな教材をさりげなく展示し、いつでも利用できるようにしておくことはとても大切である。古くから美術や書道など芸術科目においては、生徒や教師の作品を展示し、生徒の関心を高めたり励ましたりしてきたし、小・中・高・特別支援学校のいずれにおいても目を見張る実践報告や作品をご覧になった経験を持たれている方もあると思う。

学校では、教室をはじめあらゆる学校の中の空間を展示学習の場としてきた。理科の教諭として微力を注いでいた頃は、自作の実験装置を授業以外のときも展示しておいた。生徒がそれに関心を示し質問してきたときは、指導の絶好の機会である。そんなとき私の場合、時間も忘れてその場で少人数を対象とした授業が始まり、生徒諸君も時を忘れて勉強にのめり込むのである。このことは、私が小学校の時、担任の教師がガラスの一升瓶の中に注射用アンプルの容器を逆さまにして作った浮沈子を、流し場の前に設置してあったことから始まる。瓶の口に緩く付けたゴム栓を、押したり緩めたりすることによってアンプルが上下する実験を、子どもが自分で試してみるのを狙ったものであり、私はその虜になっていた。

教師になってからもいろいろな物を製作してみた。教職支援室に「逆説的力学的エネルギー演示実験装置」が置いてある。これは30数年も前に作ったものである。今では市販されるようになったが、当時は、生徒達が喜び教師は驚いていたと記憶している。教職支援室の実験装置は理科教師を目指す学生の目に触れてもらおうと、作りおいた学校から借りてきた物である。

特別支援教育においても、児童生徒の関心を引く教材を作った。福井南特別支援学校にゴロゴロザウルスという動く巨大な木製のおもちゃがあり、今でも使われている。このおもちゃは小・中・高等部の生徒いずれにも喜ばれ続けている。文字では表現できない不思議な形が、子ども達の発想にきわめて近いものだからだと思う。

教材や授業内容そのものも、生徒の発想をうまく捉えられるものであることが大切である。教員は、毎年新しい生徒に出会い、今までの自分の観念を改めなければいけないことに遭遇する。このことはたいへんなことではなく、むしろ教員としての大きな喜びと感ずるべきところである。教員は、児童生徒に接する中で若者の頃を何度も味わうことができるが、他の職業では経験できない特権でもある。これは、人間として生きていく上で最高の環境でもある。

6. 教員は何か得意なもの、自信の持てるものを持続して持つ努力をすべきである。

教員生活は学びの連続である。

学びの連続は楽しみである。そしてそのことは危機を脱出させるものである。

理科の教師は高校の場合、物理、化学、生物、地学という科目に分かれ、それぞれを専門とする教師が担当している。しかも、それぞれに実験室があり、さらにそのための準備室があり、物理の教師は物理準備室が職員室になっていて、大きな学校では物理の教師だけで5人もいたものである。選択する生徒が多い化学などは実験室が2つもあり、それでもまだ足りないといった状況であった。

私は、養護学校から高等学校に異動したとき、物理の教員で過ごせることを夢見ていた。もちろん化学も担当したが、物理の共通一次試験（今の大学入試センター試験）、二次試験を念頭に置いた授業及び補習に明け暮れていた。

それは共通一次試験が導入されたときで、国立大学を目指すためには、理科、社会は2科目ずつ選択する必要があった。私の赴任した高校は、1学年10クラスもある大規模校だったが、理科については物理、化学、生物を開講していた。すると生徒は物理か化学のどちらかを選択せねばならず、そのどちらも大嫌いという生徒達から、なぜ地学を開講しないのかという意見が出たそうである。

たとえ地学を開講したとしても、それを担当するであろう生物の教師が6人もいるから大丈夫と他人事のように思っていたが、年齢も決して一番若くはなかった物理の私に、地学を担当してくれと言われた。そのときの台詞が「養護学校から来られた赤澤先生に地学を担当していただきたい」というものだった。私は、高等学校の理科教員としての出発は遅く、皆の合意であるかのごとくやってきた依頼に反論してくれる味方もなかった。地学をどうやって教えるべきかという不安は山のようにあったものの、やむなく引き受けた。

開講すると、何とか地学で起死回生をという生徒が45人も集まった。全員3年生にして初めての地学の勉強であるが、教える方も初めてである。共通一次試験まであと半年ほどしかない。1年、2年から始めている他の科目と比べればとうてい時間数が足りない。私も初めて教科書を開き授業を始めたが、聞いたこともないような言葉もたくさん出てきて、必死で勉強した。当時の私は、地学で受験しようとしている生徒の何倍も勉強していたはずである。しかし、習う生徒の側からすれば地学の専門の先生が教えていると思っていたようで、それにしては何か変だと思うこともあったに違いない。でも、物理では自分はだめだと思っていた生徒達に、あれ意外と地学については自分は才能があるんじゃないかと思わせる効果があったとも感じられる効果が出た。

共通一次試験の結果は、地学の選択者全員が受験し、平均85点の成績を残した。もちろん学校別では県一位である。翌年からは、2年生から地学を選択する生徒も出始め、理科は4科目体制で共通一次試験に備えることになった。もちろん地学で二次試験に臨む生徒も出始め、地学も私もその学校で認められた存在になったのである。個人別成績でも、常にその学校の生徒が福井県模擬試験において一位を取っていたと記憶している。

ようやく授業にも少しの余裕が出始め、眠れぬ夜の回数も減少したように思っていたが、試練はまだ続いた。高等学校には地学専門の教師がいるという噂が、学校関係以外の人にもまで届き始めたようで、大きな工事を担当している技術者が岩石を鑑定してほしいと言ってきたのである。教務主任からその連絡を受け、「そんなことはとてもできない」と思っていた頃には、すでに2人の技術者が学校へ到着していた。正直に事情を話す覚悟を決めて技術者に会ったが、幸運なことに持参してきた岩石は私が知っている数少ない岩石だった。凝灰角礫岩と鑑定したところ技術者達も喜んで帰っていき、私は地域の高等学校の地学教師としての役目を果たすことができた。次々とこのようなことが起こったらと心配していたが、その後、私が勤務している間には何も起こらなかった。この学校には6年間お世話になったが、その地域を車で移動し喫茶店にでも入ると、今でも「高校の地学の先生」というささやき声が聞こえてくる。私自身、今でも、半年あれば立派に受験できる生徒に育て上げられるという自信を持つに至っている。

何よりもゼロからの出発に恐れをなさずにできるようになった。もちろん、特別支援教育もゼロからの出発であったので、これで二つ目の経験であるが、初めてのことにチャレンジと、受験や研究会などにおいて公的に評価されるところまで到達する努力の仕方を学んだ。

今では、当たり前のこととなっているが、教員になった場合、大学で学んだことが通用するのはそんなに長い期間ではない。場合によっては、全く初めてのことも一から勉強して教えなければならない。それがどういう形で現れてくるかは予想できないが、普段から自分の得意とするところを学び続けることは、とても重要である。つまり勉強や研究を継続し続けるのである。そこで培われる能力は、新しいことを学ぶときに大いに役立つと確信している。

いま直面している勉強、技術の習得に最善を尽くしてほしい。そのことは、必ず新しいことを学ぶときに役立つはずである。

7. チーム学校

生徒への愛着と同僚との絆によって力を発揮します。

抜け駆けや目立ちたがり屋は陰を潜めます。

教員の職務は、校長・教頭という職になる以前から学校全体を率いる場面が常にあるものである。たとえば、小学校では体育主任に若いうちからなることが多く、場合によっては、新採用でなるような人もいる。その役割は、学校全体の体育に関することのすべてをリードしていくことである。最大のイベントは、体育祭（運動会）を取り仕切ることであり、他の教員もそれに従って物事を進めていくのである。

大きな学校の時間割係にでもなるとなかなかたいへんで、時間割を組み上げるだけでも至難の業である。もちろん、その苦勞がわかっているだけに、他の教員は決して文句など言わず、みな協力的である。自分がその立場になったら置き換えて考えることができるからである。

私も、記憶に残るチーム学校を率いたことがある。それは、25～26歳の時、近畿地区の病弱教育研究会を小さな学校で引き受け、それを乗り切ったことである。事務的な仕事だけでなく、全体にアピールする教育内容の発表をするのだが、その当時作り上げようとしたベッドサイド学習の理想的システムは、時代の流れの中に埋没消滅してしまった感がある。ほぼ同じ時期、福井大学附属養護学校で知的障害児教育の第1回目研究発表会が実施され、私は全体会の発表を任された。その内容は当時の教育動向とは異なっていて、私が精神薄弱児研究を発表した論文はその雑誌の巻頭言において、ただ一つの批判を受ける論文となった。しかし、福井大学附属特別支援学校の40周年記念行事に参加したところ、当時の我々の考えや教育実践に対して、現在の大学執行部の人達が異口同音に賛同と賞賛を送ってくれていることに大いに感激した。残念ながら、当時、教頭として学校全体を率いた先生や、先輩の先生方はもう世を去っていた。

チーム学校を動かしていくことは、自分の中にある、ある種の思い込み、信念、これが正しいということとの戦いであった。そのこと自体も俎上に載せて初めて解決の糸口らしきものに遭遇してきた訳である。

生徒指導では、数人の小さいチームを作ってケース会議を開いて進めていく。担任、教科担当、部活担当、教育相談担当、教頭、校長で毎日のように会議を開いたが、どの問題も簡単に解決できるものはない。私は校長として毎日関わっていたと思っていたが、どんなに議論しても解決の方向は見出せない。我々は、「とにかく明日これをやってみよう」ということで会議を閉じ、決まったことを試みる担任らを信じ、次の会で進捗状況を確認するのである。担当する教員には、いざというときは「いつでも電話せよ、たとえ深夜であってもそちらへ向かうから」と言っておいた。チームは常に仲間の助けを背に感じながら動いているわけなのである。

生徒が行方不明になったとき、保護者はまず学校へ連絡をしてくる。そして、校長は陣頭指揮を執る。もちろん警察と連携をとりながらであるが、深夜でも家内に運転させ常に電話連絡を取りながら生徒の家に向かうのである。家に到着する頃には、考えられる場所の搜索に2名ずつ組になった教員のチームが10組ほど出発し搜索している状態である。早く行動に移した教員の組は、集合場所とされたところに搜索の結果を持ってきていて、私とほぼ同時に到着できることもある。

我々は、24時間以内に見つけ出すという強い気持ちで臨んでいた。命を預かるという強い使命感、教育愛に裏付けられた教員達の献身的行動、態度に頭が下がり、それらに涙する校長であった。

8. 哲学の時代

生徒も学生も深く考えることを望む時代に入っています。

本学において哲学入門、人生哲学を担当している。自分なりに今日における哲学の在り方を考えながら授業を進めている。すなわち、哲学史だけでなく、自然科学との関係、日本の伝統的な考えとの関係、現時点での生き方への昇華の仕方など、苦しみもがきながらの授業であるが、熱心に考えようとしてくれる学生諸君に励まされている。毎回の授業でシャトルノートをやとりしているが、このノートで出欠を取り、授業に対する質問、感想、自分の考えや経験の発表を書かせている。その中のいくつかを A4 版 3 枚ほどにまとめて、次の授業の開始前に教室入り口で配付している。これは討論の場にも活用される。私の授業の内容から出発したものであるが、学生諸君からは、他の学生の考えや意見に対する考えなども発表されている。一週間という時間のずれはあるものの、100 人ほどの学生諸君の討論としては、今のところこのような方法しか思いついていない。しかし、この方法は、考え、反論する時間的余裕を創り出せる利点もある。

私にとっての驚きは、学生諸君がよく考えている、あるいはよく考えようとしていることである。自分なりの生き方の軸足を求めようとしていることである。自らの哲学ノートを創り出そうとしていることである。心を忘れた物質文明を謳歌していると嘆く大人達とは一線を画しながら、自分の人生や今現在の自分の在り方を考えようとする若者の考えは、むしろ我々に勇気を与えてくれている。

教師教育は、人の在り方の問題である。いろいろな教育的場面においてどのような態度をとるかが教師に問われるのである。教員採用面接試験等で課される模擬授業や集団面接はまさにこの点に関する資質を見ようとしているものである。

大学での授業すべてにおいて、教える方も教わる方もベストを尽くそうという態度で臨むことこそ教師教育の基本であり最高のものである。

そのことを表そうとする言葉や生き方は、今日至る所で散見され日本においても哲学が身近な存在になりつつあることを感じている。

(平成 29 年 3 月 31 日受理)